

「臭い物に蓋をしたけど」

聖書には、本当に色々な人が出てきます。イースターやクリスマスという、キリスト教の特徴が最もよく現れる時には、キリスト教は「光と闇」「生と死」という分かりやすい二元論の福音を語ります。おそらく、どんな難しい神学理論も、信仰理解も、あるいは、複雑な人生も人の歴史も、最終的には「善か悪か」という分かりやすい考え方に収斂していくものだと私は思っています。世の終わりの日、終末を迎え世界が完成するという時には、主の裁きによって、そういう分かりやすい形に整えられるのだらうと想像します。クリスマスや、イースターというお祭りの時に、私たちは、そういう終末の出来事を、ちょっとだけ垣間見ているわけですね。「闇が敗北し、光が勝利する」あるいは、「死が飲み込まれ、生で満たされる」または「信じる者は救われ、信じない者は滅びる」という未来予想図を、先取りして味わうわけです。

しかし、そういう善悪二元論的な世界観は、あくまで「未来予想図」である点を、私たちは忘れてないでいたいと思います。いつの日か、神様の御心のままに、そういうはっきり整理され、はっきり白黒つけられた世界が訪れるかも知れないけれど、今の世界は、そうではない。多種多様な宗教が自らの信仰を表明し、キリスト教の内部においてさえ、様々な教派が「この教えこそ正しい」と信じて活動を続けています。もし仮に、今の私たちが白と黒を明確に決定付けることを望むなら、私たちは宗教戦争をするしかないでしょう。人間の力で、この世界を「正しいこと」「正しくないこと」で切り分けて断じる、完全二元論の世界にしてしまうのは、危険極まりないことです。自分とは異なる信仰が存在することも、自分とは違う信じる気持ちがあることも、認め合い、譲り合うことをしなければ、神様が愛された、この世界の平和を守ることはできないでしょう。いつか、必

ず、善と悪が明確に切り分けられ、誰の目から見ても正義が為され、誰もが完全に納得できる正しい世界はやってきます。が、それは今ではない、ということは知っていたと思います。

そんなことを思いつつ、今日の聖書箇所を読みますと、イエス様の時代から、白黒はっきりできない本当に色々な人がいたんだなあ、と思わされます。今日のお話の登場人物は、番兵と祭司長です。福音書の筋書きから言えば、番兵も祭司長も神様の敵、イエス様の敵として登場する人たちです。が、そんな彼らが、マリアさんを始めとした信仰豊かな人たちを差し置いて、いの一番に都に福音を宣べ伝えたとするなら、なんとも皮肉なお話です。今日の最初の箇所ですね。「婦人たちが行き着かないうちに、数人の番兵は都に帰り、この出来事をすべて祭司長たちに報告した」。その形は、かなり歪であると言わないといけませんが、ただ、これはマタイによる福音書において最初に行われた「復活の福音の宣べ伝え」であります。イエス様の墓を見張っていた番兵たちによって、はじめてイエス様の復活は人々に宣べ伝えられたのです。

そして、そんな最初の「復活の福音」を受け取ったのが、祭司長たちでした。この出来事を残念と捉えるか、神様の御心の不思議と捉えるか、評価の分かれるところです。しかし、興味深いのは、祭司長たちの、その反応ですね。「宿敵イエスの遺体が消えた」という報告に対して、祭司長たちは「長老たちと集まって相談し、兵士たちに多額の金を与えて、言った。『弟子たちが夜中にやって来て、我々の寝ている間に死体を盗んで行った』と言いなさい」。祭司長たちは、なんでそんな面倒臭い悪巧みをしたのか不思議でなりません。これでは、まるで「イエスは本当に復活してしまったのだから、この事実は隠さないといけない」と言っているかのようです。祭司長たちへのトラブル報告として「復活の福音」を宣べ伝えた番兵たちも興味深いですが、その報告を受けて、「そんなバカなことがあるか」と完全否定しなかった祭司長たちも、とても不思議なんですよ。

「復活」という出来事に対する、人間の反応とは、単純に「信じる」「信じない」という二元論で

はないということかと思えます。マリアさんたちのように肯定的に前向きに「復活」を信じる人もいれば、ルカによる福音書には「この話がたわ言のように思われたので、婦人たちを信じなかった」という使徒たちもいました。ヨハネによる福音書が報告する、イエス様のわき腹に指を入れたら信じるという疑い深いトマスのお話も有名です。そして、今日登場した番兵たちのようにその意味も価値も分からないながら「あまりの出来事に信じざるを得なかった」人たちもいたり、また、祭司長たちのように「自分たちにとって都合が悪いけど、信じるしかない」と判断した人たちもいたのです。マタイによる福音書の、この復活直後の出来事は、「復活を信じる」ということの奥深さ、あるいは、間口の広さを示しています。それは、まるでイエス様が敵をも愛し抜かれたように、敵対する者に対しても「復活」の真実を伝えているのだと捉えることができます。その伝わり方や、伝える場面の様子は、人間の目から見れば、歪に見え、腹黒く、不信仰に見えるかも知れませんが、この番兵たちも、祭司長たちも「イエス様が復活した」ということを受け入れいているという点で、確かに福音の受け取り手なのです。

イエス様を信じること、神様を信じること、イエス様の奇跡を信じること、神様の御業を信じること、と言うのは、私たちが思っているよりも、もっと複雑で捉えにくいものなのかも知れません。今回の聖書箇所では「復活」ということがテーマになっていますが、私たちが聖書を読んで、そこに書かれている摩訶不思議な出来事に対して、「はい、信じます」「いいえ、信じません」という明確な答えをしなければならない必要は、きっと無いのだと思います。つまり、「そういうことがあったんですね、ちょっと信じられないけど」という態度もあって良いですし、「信じますけど、でも、私は不愉快です」と感じることもあって良いでしょうし、もちろん「私は全て信じます」という告白をしても良いのですが、それが全ての信仰者に要求される必要条件だとするのは、良くありません。

私たちが生きるのは、神様の導かれる世界です。この世界には、人間の力では理解することも、整理することもできない出来事が起こっていることを神様はよくご存じです。それを起こしている原因が神様なのですから。そして、そんな世界の中で、自分の信じるべきものを探し求め、時に疑い、時に無理に信じ込もうとして葛藤する私たちの姿も神様は、すべての知っておられるのです。疑い惑う私たちにも、神様は御心を傾けてくださいます。ただ、一つ真実なのは、神様の御業は、隠すことはできないということです。私たちが信じようが、信じまいが、疑おうが疑うまいが、神様の御業は、この世界に示され、その影響を無視することはできません。当時の権力者であった祭司長たちや長老たちが、一計を案じ、「イエス復活の秘匿計画」を実行しましたが、この計画が失敗に終わったことは、ここに敦賀教会が建っているという事実からして、容易に証明されます。彼らは彼らにとって「臭い物に蓋をしたけど」、その計画は成功しなかったのです。神様の御業と福音は、どうしたって伝わり、広まり、確信を得て、人々の心に届くものなのです。

ところで、この「イエス復活の秘匿計画」が大失敗した直接の原因を考えた時、それは「やっぱり、あの時、祭司長たちが番兵の報告を完全否定しなかったからだ」と私は思ってしまいます。あの時、祭司長や長老たちが強硬に、そして堂々と振舞っていれば、もしかしたら歴史は変わっていたかも知れません。そういう風に考えてみますと、わずかでも、たとえ歪な形であっても「主の御復活」を受け入れる者は、主の肢として、その御計画に組み込まれていくのだと思います。

私たちの近くにも、主の肢である教会に、「信じる」「信じない」の単純な二元論では説明できない感情をお持ちの方も沢山いるかと思っています。「信じたいけど、なんか無理」とか「良いと思うけど、なんか無理」とか「クリスマスは素敵だけど、やっぱり無理」とか。教会が直面している信仰の課題は「信じる」「信じない」という単純なお話ではないのでしょうか。現在の立場的に、今までの関係的に、「はい、信じます」とすんなり言えない人って、きっと沢山いるかと思っています。「信じて

いるけど、何か不都合なことがあって、認められない」という祭司長や長老たちの心模様は、形は違えど、今も昔も存在している複雑な信仰心なのだと思います。この複雑な信仰心に対して、私たちにできることは、それほど多くはありません。ただ、「そういう複雑な信仰心もあるんだ」と認めることはできると思います。そして、認めた上で、祈りつつ、私たちは私たちの伝えたいことではなく、「聞く人に恵みが与えられるように」言葉を選んで伝えることが大切なのだと思います。

ただ、心配しなくても良いのは、先ほども言ったように、この世界は神様が導かれる世界です。私たちが自分の正義のためではなく、御心を求めて祈りつつ隣人愛に忠実に尽くしていれば、きっと、神様が良いように導いてくださいます。復活の福音は、きっと沢山の人たちに届きます。もう届いている人たちには、行動を起こすきっかけを与えてくださいます。イエス様の御復活の後、思わぬ形で福音が伝播していった御業は、今も尚、続いています。神様の奇跡は現在進行中だということです。そのことを信じて、私たちも蓋をすることのできない「主を信じることの喜び」を宣べ伝えて参りたいと願うものであります。

お祈りを致します。

神様。喜びのイースターから1週間を経て、また私たちはこの礼拝堂で、主の礼拝を捧げています。主の御復活の後にも、様々な出来事が起こり、あなたの御業が示されたことを、今日も聖書の御言葉から知ることが出来ました。復活の福音が、番兵や祭司長たちにも伝わり心動かされた事実を知り、あなたの御業の不思議と、御心の深さを思い知らされました。あなたには、あなたの御計画があることを思います。私たちは、一足早くあなたのことを受け入れ、信じる者として、あなたの御計画を信頼し委ねつつ、祈り愛することを続けて参りたいと思います。どうか、敵の心をも動かす、あなたの福音が、多くの人たちに届き、生きる希望と幸せを見出すことができますように。主と共に生きることの安らかさを多くの人たちが知ることが出来ますように。あなたが導いてください。そして、私たちを十分に用いてください。

このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。